

TAKING OFF

Vol. 2

大阪学院大学／大阪学院短期大学

発行日 2009年7月15日 国際センター ニュースレター



1. Message from 国際センター所長: マイク・マツノ 経営学部准教授

OGUキャンパスの国際化が本当に意味するものとは？

前回のニュースレターでは、OGU学生が海外で得る語学力、異文化の認知、グローバルな生活スキルなどの“ブライスレス”な経験、および海外留学した学生たちが大学にもたらす価値について述べました。現在、4年間の大学生活の間に短期海外研修あるいは長期交換留学プログラムに参加しているのはごく少数の学生に限られているのが現状です。したがって、OGU学生に異なる考え方、コミュニケーションや交流の仕方に触れてもらう場を提供するためには、キャンパスを少しずつ国際化することが必要不可欠なのです。

大学のキャンパス内で国際化を最大限活用し、発展させていくと言う考え方は、ヨーロッパやアメリカで広く論じられ、継続して実践されています。つい最近まで、OGUキャンパスを“国際化”と言うミッションは、学内全体での教育的な面においての優先順位がそれほど高いものではありませんでした。これは主に国際化にどう取り組んでいけば良いのかわからなかったためではないでしょうか。しかし、私はその時期は今だと確信しています。日本が世界で勝ち抜くために、またOGUが国内で競争に勝ち抜くためには、OGUキャンパスを国際化することに対して、進歩的に考え、行動することが求められています。

では「どうやって？」と思われるかもしれませんが、“国際化”には様々な戦略、施策に加えて、大学の授業、活動も含まれます。OGUができることは、もっと多くの外国人教員をキャンパスに迎える、国際的な問題や課題に焦点を当てた授業を英語で開講する、グローバルな課題、ケーススタディ、インターンシップを通常の学部の授業に組み込む、教員主導の短期海外プログラムを実施する、他の海外大学とより多くの教員や学生交換を進める、外国人教員との国際的な共同研究プロジェクトを推奨するなどがあります。できることは数限りないのです。

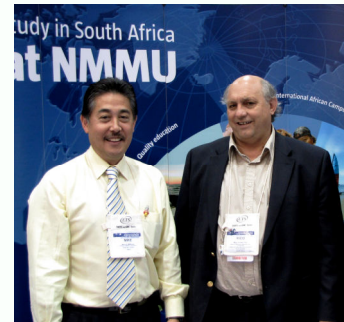
しかし、その中でも、毎年OGUにやって来

る受入れ留学生は、恐らく最もパワフルな国際化のメカニズムではないでしょうか。学内の多くの人たちが、キャンパスに、またOGUの一員として20カ国以上から留学生を迎えることによって得る価値や計り知れない影響を理解していないように思います。例えば、留学生の何人かは、OGU学生と一緒に日本語で開講される授業やセミナーを受講しています。また何人かは、体育会系や文系クラブやサークルに参加しています。さらに、多くの留学生が日常的にI-Chatラウンジに参加し、日本人学生と教室外でも交流を持ったり、勉強したりと積極的に活動しています。

留学する機会がないOGU学生たちにとって、外国人留学生と友達になり、話をし、彼らと共に時間を過ごすことが、少なくとも他の国から来た人たちや文化、自分とは違う背景を持つ人たちがどのように考え、コミュニケーションをし、生活をするのかを知る窓口となり、それがかけがえのない経験ともなるのです。また留学生との友情は、日本人学生にとって海外留学への興味を引き出すきっかけにもなります。日本人学生は、「違っていても大丈夫なのだ」と言うことを留学生から学び、それと同時に姿たちは異なっても、本質的にはみんな同じだと認識する“パラダイムシフト”を体験するでしょう。私たちはみんな同じ人間なのです。

学部の正規授業、セミナー、英語コース、J-Bridge、日本語授業で留学生を教えている教員たちは、留学生たちが一生懸命勉強し、努力して学んでいる姿を非常に高く評価しています。また留学生たちがOGU学生にとって良いお手本になるとコメントする教員も多数います。

留学生がOGU学生やキャンパスにどれほどの影響を与えているのかを測る方法はありません。しかしながら、頻繁にI-Chatラウンジに来ている学生や1号館のラウンジにいる学生に一度聞いてみてください。彼らは留学生との交流と一緒に過ごした経験に対



して前向きなコメントをするに違いありません。結果として、留学生たちがOGU学生たちに直接影響を及ぼし、キャンパス全体の国際化への認知を高めていることは間違いありません。留学生の存在が、知らず知らずのうちにOGU学生に人や文化の相互の関係性を理解させ、異文化、異なる価値観や姿勢を受入れさせ、グローバルな多様性を理解させることにつながります。さらには彼らの存在が、OGU学生の本学での4年間の学生生活や体験にさらなる価値をもたらすことでしょう。

本年の後期には、OGUは12カ国から51名の留学生を迎えます。この51名の学生たちは、海外研修や交換留学に参加しない日本人学生にとって世界と彼らを結ぶ“架け橋”になるでしょう。さらに、留学生たちは、キャンパスや教室の国際化を進める上での羅針盤です。どうぞ彼らを歓迎し、新しい留学生が日本人学生と交流していけるように協力していただきますようお願いいたします。また授業、セミナー、学外研修などに留学生をどんどん参加させてください。留学生と日本人学生と一緒にするには、最初は多少の労力とエネルギーが必要ですが、上手く回り始めれば、後はそれほど難しいものではありません。

マーシャル・ブルーストの言葉に、“**本当の発見の旅とは、新しい土地を見つけることではなく、新しい目で見ることだ**”とあります。留学生との交流は、OGU学生にとって発見の“新しい目”を開くチャンスだと確信しています。

2. 交換留学レポート:ダウリング大学(ニューヨーク州) 青木 崇洋(外国語学部4年次生)

青木君は、2008年8月から2009年5月までアメリカに留学し、現地ではアメリカ人学生に混じって正規の学部授業を受講するなど、多くの貴重な経験を積んで帰国しました。

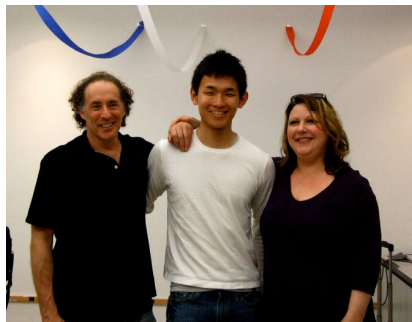
「なんで留学行けんのかな? 留学先に着く前まで、これが私の本当の心境でした。交換留学へ行けるとわかってからも、この言葉が私の頭の中を毎日のように走り回っていたことを今でも覚えています。「俺の英語って本当に向こうの人に通じんのかな?」「向こうの授業はどんなんだろ?」「ついていけるかな?」「向こうのメシはうまいのかな?」まずくて食えなかったら、どうしよう。」そんな不安で頭の中はすでに一杯で、「観光地に行って、アレ買ってコレ買って、そんでもって向こうでいっぱい友達つくって、いっぱい遊んでやる!」なんて願望は出発日が近づくにつれて、知らないうちにどこかへ行ってしまいました。

それもそのはず、出発前は英語なんてほとんど話せなかったし、勿論英語の洋画を字幕なしで見たって、役者が何を言っているのかもチンプンカンプン。それに加えて、生まれてからこれまで海外に行ったことは、高

校の修学旅行でカナダに3、4日行ったきりで、他の国がどんな雰囲気なのかも想像がつかなかったもので、本当に不安でしかたなかったのです。しかしその一方で、友達や先生、周りの人の前では、調子に乗って「留学マジ楽しみ、早く行きてー!」なんて言って、みんなから「全然不安とかないの?」って聞かれても、「いやー、全くない。マジ楽しみでしょうがない。」と、まあ心にもないことを言っていました。そんなことをしている間に、色々な不安を誰かに話す機会も失い、その不安を抱えたまま留学先に着いてしまった訳です。

そんな心境のまま留学先に着いたので、最初は当然無意識に緊張してしまい、自分が今どう感じているのか分からない日々が続きました。例えば、ずっと行ってみたいだったニューヨーク・シティを訪れても全く感動しなかった。というよりも素直に感動できなかったと言う方が正しいかもしれません。いつもだったら感動した時、鳥肌が立って身体の内から「グオツ」とくる何かがあるのに、現地に着いてから数日間はその「グオツ」が何かに引っ掛かっていつも不完全燃焼になってしまうのです。でも、そんな中ではっきりと分かることが確かにありました。それは、感動の度合いは違っても、私は色々なものを見て実際に「感動していた」という事実です。

このことに気づき始めた頃、今まで抱いていた不安は自然に頭の中から消え去っていました。そして抱えている不安よりもより大きな感動を期待して、色々なことに純粋に



目次:

Message from 国際センター所長	1
交換留学レポート	2
2009春期海外研修	2
受入れ留学生紹介	3
ホームステイ体験紹介	4
国際センターニュース	4

向き合うようになっていったのです。その後、私の生活は今までとはガラリと変わり始めました。今まで嫌だったものから楽しさを発見し、今まで好きだったことから、新たな楽しさを見いだすようになりました。自分や周りの状況がどんな状況であろうと、素直により楽しく、より良くなるように何にでも挑戦するようになり始めました。

私がこの経験から学んだことは、“自分の常識を壊す楽しさ”です。今まで私は何か不安があったら、留学は行かない方が良くと思っていました。私は“感動というものはこういうものだ”と自分の中で決めつけていました。しかし、それによって本当は留学を十分できるのに、どこか一步踏み出せなかったし、本当は感動しているのに、素直に感動できなかったのです。“私が持っている常識は、自分が今まで生きてきた中で形成された自分の常識でしかない”と私は今回の留学を通して感じました。この感覚を味わえたのは、日本を外から見る機会を得ることができたからだと思います。

みなさんも外から日本を一度見てみませんか?

3. 2009 春期海外研修:タイ・ヴィレッジ・キャンプ~高木 和俊(国際学部2年次生)

高木君は、2009年3月11日~20日の日程で実施されたOGUの提携大学であるバンコク大学主催のタイ・ヴィレッジ・キャンプに、他大学の学生に混じってOGUからただ一人参加しました。

私は、国際協力に興味があり、教室で学ぶだけではなく実際に外に出てボランティア活動をしたいと考え、大阪学院大学の国際学部を選びました。今回、語学力には自信がありませんでしたが、短期の海外研修では語学力の基準がなく、長期の交換留学より参加しやすいため、今年の春休み中の約10日間タイ・ヴィレッジ・キャンプに参加しました。

私にとって初めての海外だったため不安で一杯でしたが、このプログラムが大阪学院大学への入学を決めた理由の一つだったので、参加できることをとても楽しみにしていました。研修に行くまでの期間は、国際センターの方々や前回ワークキャンプに参加した先輩などの説明やアドバイスをもらい、徐々に不安は薄れていきました。今回のキャンプを通して、現地の様子をテレビや



タイ・ヴィレッジ・キャンプの子供たちと

雑誌を通してではなく、自分の目で見て、自分の肌で感じる事ができたので、私にとっては非常に貴重な経験になりました。特にマイク先生に言われた「感謝の心」、「タイのビジネスホスピタリティ精神」、「言葉はツール」、「勇気をもって外に踏み出す事の大切さ」を身を持って感じてきました。

まずタイでは、初日の4日間はバンコクのホテルに泊まり、観光をしました。歴史的な部分やアミューズメントとしても楽しめる場所がたくさんあり、表現しきれないほどの感動と興奮がありました。タイは仏教国なので至る所に寺院や車の中に仏像があり、また国王に対する尊敬の気持ちが強いようであり、あちこちで写真を目にしました。タイの人の印象はとてもゆったりしていて、日本人のように時間に縛られ、時間に追われるような感じは一切ありませんでした。

そして、本来の目的であるキャンプは、高級なホテルが並ぶバンコクと正反対の地方の村で行われました。どんな場所かと不安でしたが、日本にもあるような田舎の小学校

のような所で、そこで村の人と子供たちが私たちを温かく歓迎してくれました。タイは微笑みの国と言われるだけあって皆、笑顔が素敵で明るくとても元気でした。キャンプでは建設、食事、学校に来た子ども達の世話の3つの班に分かれて作業を行い、私は食事と建設を担当しました。まず食事班は肉や野菜を切り、炭をおこして調理をしました。味見をしたり、炭を加えたりしながらタイ語を教わったり、あだ名を付けたりしました。ちなみに私のあだ名はソム・チャイです。1日だけ日本人学生がカレーを作り、とても好評でした。建設班は石、砂、セメントの素と水を混ぜて作ったセメントをバケツで運び、壁に流し固めていくという作業で基礎を作っている、その上にブロックを積み、それをまたセメントで固めていくという作業でした。20分ごとぐらいに「休んで良いよ」と言われるのですが、あまり休んでいると、ただのお客になってしまうので出来る限り手伝いました。そして、作業中に大変だったことは「言葉」でした。英語が解る人もいましたが、英語に自

信が無いときにはジェスチャーでなんとか伝えました。

私がこのタイ・ヴィレッジ・キャンプで得たことは、他人に対する感謝の気持ちと分け隔て無く相手を受け入れることの大切さです。そしてこのキャンプで同世代のタイ学生と出会えたことはとても素晴らしいことでした。同年代の学生が一致団結して、一つの目標に向かって楽しみながら一生懸命にボランティア活動に取り組んでいる姿を見て、私自身も「負けてられない」という気持ちになりました。

最後に、今回の研修を通して、不安を抱えたまま立ち止まっていたは、何も生まれないということを実感しました。行動することが大切なのだと確信しています。これからは長期留学という目標に向かって、自分に自信を持ち、そして語学力のアップのためにTOEIC®講座を受け、今まで以上に新たな気持ちで日々努力していきたいと思います。

4. 受入れ留学生紹介：ヨハナ・ラウア（ドイツ／トリア大学）

ドイツ・トリア大学からの交換留学生ヨハナさんをご紹介します。ヨハナさんはドイツにいる時から日本語の勉強をしていました。トリア大学には日本人留学生もいて、日本語の先生も日本人だったので日本人と接する機会は多かったそうです。

ヨハナさんは日本でホームステイをしていますが、ドイツから来たヨハナさんを気遣い、ホストファミリーは英語で話し掛けることが多かったそうです。しかし、ヨハナさんは日本語を勉強しに来たので、できるだけ日本語で話したいことをホストファミリーに伝え、ファミリーの方々にも理解していただいて日本語を話す機会が増えたそうです。ホストファミリーときちんとコミュニケーションが取れたことがよかったとヨハナさんは言っています。

日本の言語や文化を学ぶことに積極的なヨハナさんは、学校でもさまざまな活動に参加しています。彼女が特に楽しんでいるのはアカペラサークルです。アカペラサークルは小さいサークルですが、メンバーはビギナーにも優しく、みんなが一体になって活動しているそうです。ヨハナさんは一人だけ外国人ですが、仲間たちが日本語で話してくれて、他の日本人と同じようにグループの

一員として受け入れてくれるという点をとっても喜んでいました。

アカペラサークル以外の活動として、ヨハナさんは日本人学生と一緒に学部ゼミの授業と日本史の授業を取っています。学部の授業を取ってみて、ドイツと違う日本の大学の制度に驚いたそうです。日本では大学生活の前半に一般教養を学び後半に専門を学びますが、ドイツでは一般的なことは高校で学び大学では専攻のみ勉強するそうです。

ヨハナさんは、トリア大学では日本学と英語学を専攻し、日本や英語圏の語学と文学を学んでいます。トリア大学ではドイツ語が使われていますが、英語学の授業は英語で行われます。卒業まで後2年ありますが、将来日本語が使える仕事に就くのがヨハナさんの夢です。

最後に、ヨハナさんからOGUの学生さんたちへのメッセージをもらいました。

「外国に行くことは怖いことではありません。危ない、怖いと感じるかもしれませんが、行く国について事前にしっかり情報収集をすれば自信が付きまします。現地ではその国の人たちとの交流を思う存分楽しんでください。」

(T.K)



5. ホームステイ体験紹介～台湾からの交換留学生 李 雨鴻 (リー・ウコウ)



ホストファミリーとの台湾旅行

おいしそうなお弁当ね！自分で作ったの？」「ホストファミリーのお母さんと一緒に作りました。」

ある日、ウコウさんが友達と一緒にお昼ご飯を食べているところに偶然私が通りかかりました。その時私の目に飛び込んできたのは、彼女が食べていたおいしいそうな手作りのお弁当でした。ウコウさんは一緒にお弁当を作るほどホストファミリーのお母さんと仲

良かったです。

ウコウさんは現在の小林ファミリーと今年の2月から一緒に住んでいます。お母さんはとても優しい方で、自分のお母さんのような方、お父さんは何でもご存知で、どんな質問にも答えてくれる先生のような方だと紹介してくれました。

今年のゴールデンウィークには、5泊6日でホストファミリーのお父さん、お母さんと一緒に台湾旅行をしたそうです。ホストファミリーのお父さんとお母さんが台湾に興味を持ってくれたことが嬉しかったと目を輝かせて言っていました。台湾では、ウコウさんの台湾の実家や大学を訪問し、台湾の家族、大学の先生、クラスメートをホストファミリーに紹介でき「めちゃくちゃ楽しかった！」と活き活きと語ってくれました。

そしてホームステイ生活を通じて、ウコウさんは料理に興味を持ったようです。初めは料理が全然できなかった彼女も、お母さんの晩御飯のお手伝いをしながら日本の料理の作り方を学びました。始めはウコウさんの

包丁の使い方を見てお母さんは「怖い」「あぶない」と目をふさぐことも多かったそうですが、少しずつウコウさんも包丁に慣れ、だんだんと上手になったので最近はお母さんも安心されているそうです。

お母さんは料理がとても上手な方で、お母さんが作る料理の中で特にウコウさんが好きなのはマカロニグラタンです。お母さんに今日のご飯がおいしかったと話すとレシピを教えてくれて、一緒に作ってくれるそうです。教えてもらった料理の中で、ウコウさんの得意料理になったのはオムそばです。初めは作るのが難しかったそうですが、卵をきれいに包むコツやおいしく作る秘訣を教えてもらって上手になりました。

ウコウさんは、「台湾に戻ったら日本が恋しくなるけれど、ファミリーに教えてもらった料理を作っているだけでも日本を思い出すことができる」と言っていました。台湾でウコウさんが家族や友達に日本の料理を披露する姿が目に見えますね。

(T.K)

6. 国際センターニュース

1) 2008-2009国際交流プログラム修了式

2009年7月4日に、国際交流プログラム修了式が開催されました。24名の交換留学生、1名の研究生がプログラムを修了し、お世話になった先生方や仲良くなった友人たちとの別れを惜しんでいました。彼らが母国に戻っても日本語を勉強し、また日本で再会できる日を楽しみにしています！

2) 2009-2010国際交流プログラム

2009年9月には、新しい留学生51名をOGUに迎えます。

今後の日程：

- 9月7・8日 来日
- 9月10～12日 オリエンテーション
- 9月14日 秋学期授業開始
- 9月19日 ウェルカムパーティー 11:00～13:30

51名の留学生をサポートするボランティアグループISSTのスタッフを募集しています。留学生との交流を通して、新しい世界を見つけてみませんか？詳細は国際センターまで。

3) 2009-2010交換留学プログラム

第1号のニューズレターでもお知らせしたように、18名の交換留学生たちが7月から順次海外の提携大学に向けて出発していきます。出発第1号は、南アフリカのネルソン・マンデラ・メトロポリタン大学へ1学期間留学をする経済学部4年生齋藤翔君です。次号には齋藤君の南アフリカからのレポートを掲載予定ですので楽しみに。2010年ワールドカップ開催に向けて準備を進める南アフリカの様子を生声でお届けします。

7. スタッフ紹介～久米井宏之係長

国際センターは、マイク・マツノ所長、後藤登副所長の下に、久米井係長、課員4名で構成されています。今回は、国際センター課員の心のよりどころ久米井係長を紹介してみたいと思います。



久米井係長は、OGU一筋28年。今から約5年前に国際センターに配属となり、課員が一新された今となっては生き字引のような存在となりました。ビールと阪神タイガースをこよなく愛し、いつも私たちに笑いを提供してくれる愛すべき上司です。誰にでも本心に優しく接してくれるので、外国人留学生たちからも「久米井さん、久米井さん」と慕われていました。慕われたと同時に、かなり面倒も掛けられていたような気もしますが、どんな時も怒ることなく、おだやかに接している姿は尊敬に値します。困った顔は何度も見ましたが、怒った顔は一度も見たことがありません。すごいと思いませんか？

ところで大学時代は長髪だったと言う噂を耳にしましたが、本当なのでしょうか？ABBAが好きだと言う噂もありますが、どうなのでしょうか、久米井係長？